

昔、日本でエンジニアをしていたころ、ホームページ作成の技術には自信があったのですが、それだけではだめだなあ、といつも思っていました。インターネットがどんどん普及して、コンピュータ技術が、一部のエンジニアだけのものではなくていく過程を体験しながら、すぐに陳腐化する技術を追いかけることに疲れるとともに、プログラマーやエンジニアは使い捨てられるようになった、と感じました。その技術をベースとして、その上に載せるサービスやコンテンツを構築するセンスみたいなものが必要だと思いました。そのセンスがあれば、技術力がなくても、技術者を使えばいいのです。

今、私はアフリカまで来て、そんな風に使い捨てられるエンジニアを育てようとしているのでしょうか。技術を利用するセンスは、教えようと思って教えられるものではないし、私にそのセンスがあるわけでもありません。ただ、私がプログラミングを学び始めたころ、覚えただけの限られた知識でも、そこに自分だけの仮想空間をつくれる面白さを感じたのです。それを感じてもらえる機会を提供したい、と思ってやってきたのです。

しかし、私の思いは空回り空振りの連続でした。この虚しさを、日本語クラブや、絵本の読み聞かせで紛らわせていたのです。日本語クラブを始めるとき、みんなが子供の時に親しんだお話や本があったら、それを日本語にしてみよう、と呼びかけていました。日本のお話をいっしょに読むうちに、自分が昔読んだ絵本を持ってきてくれる学生や、モザンビークの昔話を教えてくれる学生が出てきました。

コンピュータ技術を教える活動と、絵本の読み聞かせは関係ありません。関係づける必要もありません。でも、もし、学生達とモザンビークの絵本をつくることができれば、どんなにいいだろう、大学のサーバーで公開できる、ウェブ絵本をつくれたらいいのに、と思っていました。関係ないふたつの活動を関係づける方法を模索していたのです。そうしたら、日本語クラブの学生達の中に、絵を描くのが趣味だ、という学生が何人かいたのです。彼らはアニメやコンピュータゲームのファンなので、その方面から絵を描くことに興味を持ったのでしょう。その絵を見せてもらったら、とても素敵なのです。しかも、彼らはデジタルで絵を描きます。絵具や絵筆や画用紙がなくても、スマホやコンピュータで絵が描けるのです。絵を描く道具は普及しなくても、スマホはどんどん普及しています。

彼らに絵を描いてもらえば、ウェブ絵本をつくれる、と思いました。ちょうど、簡単なゲームプログラミングを教えていたので、ウェブ絵本にゲームを付け加えることを思いつきました。ゲームに必要なちょっとした画像も、学生がデザインしてくれるでしょう。日本語クラブの学生と、情報学部の学生がチームを組んで、モザンビークの昔話をウェブ絵本にして、そこにゲームを載せるプロジェクトを、立ち上げてみることにしました。

このプロジェクトは、学生にとって学位に関係ないクラブ活動です。この国の学生生活に、クラブ活動という概念はありません。そういう活動の意義がわからない学生も多いでしょう。だか

ら、どうやって、このプロジェクトに興味を持ってもらうか。これが第一関門です。次回、このプロジェクトの経過を報告します。

学生に教えてもらったモザンビークの昔話を、絵の好きなルーベンが描いてくれた絵とともに紹介します。ドラマ仕立てにして、ちょっと脚色してます。この日本語は、学生が演じやすいように、なるべく簡単な表現にしています。

ねずみと猟師

昔、罾を仕掛けて獲物をとる猟師がいた。彼には目の見えない妻と3人の小さな息子がいた。ある日、彼が罾を見て回っていると、ライオンが話しかけてきた。

ライオン： おい、おまえ。ここで何をしているんだ。

猟師： 獲物がとれたかどうか、罾を見て回っています。

ライオン： そうか。ここは俺のナワバリだ。おまえの次の獲物を俺にくれ。

猟師： ううん、しかたない。わかりました。

しばらくして、猟師は少し離れた町へ友を訪ねて出かけた。その日のうちにはもどらなかった。家では、食べ物がつきて、家族は困っていた。

妻： ああ、食べ物がない。どうしよう。夫は出かけていないし、私は目が見えない。ああ、どうしよう。

こども 1: おかあさん、おなかすいた。

こども 2: おかあさん、おなかペコペコだよ。

こども 3: おかあさん、何か食べたいよ。

妻： わかった、わかった。ちょっと待って。何か食べ物がないかしら。何か罾にかかっているかもしれない。キャー！

妻は目が見えないので、罾に落ちてしまった。その様子を、ライオンは藪の中から見ている。これで、猟師がもどったら、約束通り獲物をもらえる、とライオンは思った。

ライオン： 見ろ、俺の獲物だ。

猟師： ああ、おまえ。どうしたんだ。



妻： あなた、助けてえ。

猟師： あれは私の妻です。獲物じゃない。

ライオン： でも、罠に落ちてる。俺にくれ。

猟師： ううん、困った！

そこへねずみがやってきて、どうしたんだ、ときくので、ライオンが説明すると、ねずみはしかたない、と言う。

ねずみ： しかたないですよ。約束は約束です。

猟師： 何だ、ねずみ！？ おまえは関係ない！

ねずみは、ライオンからちょっと離れて、猟師の耳にささやいた。

ねずみ： 大丈夫ですよ。助けてあげます。

猟師： 何、本当か？

ねずみ： わかった、と言って、帰ってください。

猟師はねずみの言う通りにすることにした。

猟師： ライオンさん、わかりました。私は帰ります。

妻： ええ！？ あなた、帰っちゃうのお！！

ライオン： ううん、うまそうな人間だ。

ねずみ： ライオンさん、ライオンさん、自分で罠をつくれば、獲物は全てあなたのものですよ。

ライオン： お、そうだな。

ねずみ： こちらへどうぞ。ほら、これを見てください。

ライオン： 何だ何だ。

ガシャーン！

突然罠の扉が閉まり、ライオンは檻の中になってしまった。

ライオン： わあ、ねずみ、俺をだましたな！

ねずみ： さあ、おくさん、帰りましょう。

妻： ああ、ねずみさん、ありがとう。

妻はねずみといっしょに家に帰り、それからねずみは、その家に住んで、家族が食べるものは何でも食べるようになった。以来、ねずみは人の家に住み、何でもかじるようになったとき。

日本語クラブの学生達の中には、孤児院でいろいろなボランティア活動をしている子が何人かいます。彼らは以前から、モザンビークの昔話を、子供達に紹介する活動をしていたそうです。彼らの活動に、日本の昔話も加わったそうです。今度、彼らがいつもサポートしている孤児院で、日本の昔話の劇をやるそうです。私がいなくても、彼らが自分達で練習してる、と聞いてうれしくなりました。